

コレクション展 2014-III

白の上の白 色・背景・余白

2014年11月1日(土)～2015年2月8日(日)

作品そして展示空間の中で様々な表情を見せる「白」に着目

作品とわたしたちをつなぐものは何でしょうか。「作品と関係を築く」とはどういうことでしょうか。「心がうごく」「わかる」「何かひっかかる」など、人によって受け取り方は異なるでしょう。また、それぞれの作品は別々の特徴を持っていて、そのバックグラウンドもひとつひとつ違います。そのような作品が、展示室というひとつの場に置かれながら、展覧会というひとつの空間が成立しているのはなぜでしょうか。

今回は「白」をキーワードに、作品と空間のことを考えてみたいと思います。ある作品の中で強烈な存在感を示したかと思えば、別の作品では背後に溶け込み透明のような姿も見せるなど、作品とわたしたちの間で「白」がどのように変容し作用しているのかを探ります。

●構成

1/白の上の白

ひとことで「白」と称してもそれぞれ全く異なる質感をもっています。見るほどにその差異は広がります。釘や針金という鋭利な素材をも柔らかく包みこみ、静謐さをたたえます。

2/背景としての白

白い壁に囲まれた空間(=ホワイトキューブ)は、各作品の個性をこの上なく際立たせながらも、隣り合った作品の存在を極力妨げず、鑑賞者の意識を作品に集中させます。

3/モノクロの表現における白

あらゆる色彩に対して常に中立である白を、この上なく際立たせるのは対極に黒の存在があります。モノクロームの代表的な表現として、版画や写真があげられます。

4/黒の中の白

黒はすべての光(=色)を吸収します。あらゆる色が黒の中に存在するともいえます。すべての色彩が黒に飲み込まれても、どんなに小さい要素であっても黒の中で白は存在感を放ちます。

5/余白 白の広がり

余白は物理的な空間を超えた広がりを生み出します。李禹煥の作品は、物理的な余白が概念としての余白に昇華していきます。始まりは一つの点、あるいは濃く次第に薄く引かれた力強い一本の線。その線自体が意思を持ち他の線と共鳴しています。

●出品作家

アンディ・ウォーホル、岡田謙三、オノテラユキ、恩地孝四郎、河原温、金洪錫、草間彌生、イヴ・クライン、桑山忠明、駒井哲郎、ジョージ・シーガル、嶋剛、ジャスパー・ジョーンズ、白髪一雄、杉全直、杉本 博司、ピエール・スーラージュ、高松次郎、田中敦子、堂本尚郎、吉原治良、土谷武、朴栖甫、浜口陽三、福島秀子、舟越桂、サム・フランシス、ルイ・ル・ブロッキー、ヨーゼフ・ボイス、細江英公、クリスチャン・ボルタンスキー、アグネス・マーティン、村上善男、元永定正、吉仲太造、米田知子、李禹煥、モーリス・ルイス、ロバート・ロンゴ

【会期】 2014年11月1日(土)～2015年2月8日(日)
【開館時間】 10:00-17:00 ※入場は閉館30分前まで
【休館日】 月曜日(ただし祝休日にあたる日は開館し、翌日休館)、
年未年始(12月27日～1月1日)
【観覧料】 一般370(280)円、大学生270(210)円、
高校生・65歳以上170(130)円 中学生以下無料
※()内は30人以上の団体料金 ※11月3日文化の日は全館無料

広島市現代美術館(学芸担当:小島 広報担当:後藤、鈴木)

〒732-0815 広島県広島市南区比治山公園1-1

TEL/082-264-1121(代表) FAX/082-264-1198

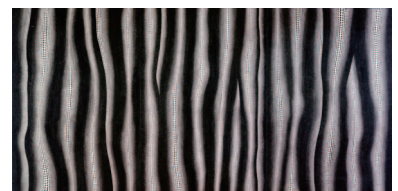
E-MAIL/hcmca@hcmca.cf.city.hiroshima.jp



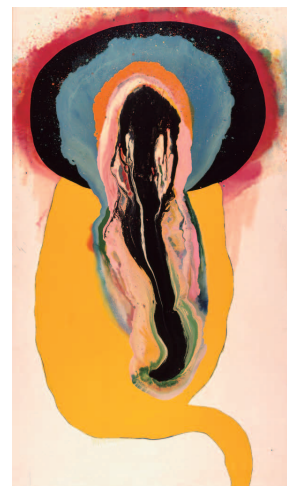
李禹煥《線より #80060》1980
「5/余白-白の広がり」より



浜口陽三《ざくら》1958
「3/モノクロの表現における白」より



草間彌生《よみがえる魂》1995
「4/黒の中の白」より



元永定正《作品》1965
「2/背景としての白」より